

第4章 マレーシアを構成するエスニック・グループの社会文化的背景

はじめに

国民統合の問題は、エスニシティ、あるいはエスニック・グループという新しい概念の視点から議論されるようになってきたことは第1章で述べてきたが、マレーシアの統合を考えるために、ここでは、マレーシアを構成するマレー人、華人、インド人それぞれの社会文化的背景を探りたい。

前述したが、マレーシアは、ブミプトラ (*Bumiputera*) と、移住してきた華人やインド人によって形成された複合社会である。ブミプトラとは、マレー語でその土地にともともと住んでいた人々を指す。マレー人 (*Melayu*) とその他ブミプトラ (*Bumiputera Lain*) に細分化し、その他ブミプトラは、オラン・アスリ (*Orang Asli*) といったマレー人以外の先住民を指す¹。マレーシアは1957年の独立より、マレー人を主として国家統合を進めてきた。ブミプトラは、その過程においてマレー人とその他の先住民を多数派として設定し、優位性を示す考え方として登場した。ブミプトラの社会的・経済的地位が華人やインド人と比べると全体的に低かったことを背景に、非ブミプトラとの間に様々な優遇制度を取り入れたブミプトラ政策は、マレーシアの最大の特徴ともいえる国家開発政策である。

主要なエスニック・グループ順にみると、マレーシアを構成するのは54.6%を占めるマレー人、非ブミプトラの華人が24.6%、同じく非ブミプトラのインド人が7.3%である²。

マレーシアの中華系住民については、マラッカ王国の成立後、交易の拡大とともに、港湾都市マラッカが発展した15世紀から、ポルトガルやオランダが統治し、19世紀にイギリスの植民地になるまでの間を第1期、続いて、イギリス統治が本格化し、大量の労働者が流入し、ジョホールやペナン、ペラ、スランゴール地域などに移住していった頃からイギリス統治の終焉までの第2期に分類することができる。この定住の時期により、その後の立場や役割がかわってくることは第3章で詳細に述べたとおりである。

インド系住民の移住は、18世紀終盤から増加し、イギリス統治の終わりまで続く。ピークは1920年代後半であった。大半はカンガーニ (*Kangani*) と呼ばれるインド政庁などのリクルートによる労働者で、ほとんどが南インド系からペラやスランゴールに移住した。中でもタミル人が多く、85%以上を占めている³。そのために、数あるインドの言語の中で、タミル語がマレーシア・インド人の主要言語となった。また少数ではあるが、植民地政府と労働者の間を取り持つ役割を担った、英語教育や高等教育を受けたエリートたちも移住している。

このように流入した移民は、イギリス植民地政府やプランテーションの事業者などによって、就業や居住地が管理され、社会的にも、文化的にもエスニック・グループによる棲み分けや調整が行われた。1957年の独立時は、権力移譲という形でこの統治機構の枠組を継受した結果、言語や宗教の違いが、エスニック・グループ間の境界線をくっきりと表すこととなった。

本章では、これらの経緯を前提にまずエスニシティとエスニック・グループの概念を検討し、次に研究におけるその定義について考察した後、マレーシア社会を構成するエスニック・グループとその特徴を述べ、最後に華人のエスニシティに簡単に触れる。

第1節 エスニシティとエスニック・グループについて

(1) エスニシティについて

マレーシア華人について論ずるために、エスニシティ、エスニック・グループについて簡単にではあるが、検討する。

エスニシティは比較的新しい概念で、20世紀前半、社会科学の分野に登場し、1960年代には社会人類学で頻繁に使用されるようになった。政治学や社会学において、特定の集団を位置づけ、分析しようとしたことから、研究視点や分析目的によって捉え方が違い、また定義づけも多様である。

例えば、「言語、宗教、歴史的経験、共通の祖先、共通の習慣や制度といった文化的属性を絆に相互に結ばれていると感じる人々の集合体を対象に、彼らを結びつけるこ

うした文化的絆にもとづくアイデンティティ」と位置づけた上で、関根政美は、「本来の伝統に根づく文化に基づいた民族意識に対し、希薄化しつつも、民族であることを象徴的に主張する集団をエスニック集団といい、そうした意識をエスニシティと呼ぶ」⁴と定義している。また、トーマス・H・エリクセンは、「自らを固有だと見なしている行為者間におこる社会関係の一つである」⁵と定義する。一方、初瀬龍平は、「民族とは政治的権力をもつか、あるいはそれを追及するものであるのに対して、エスニシティとは、政治権力ではなく文化的自治をもつか、それを求めるもの」⁶と定義している。

これらが共通しているのは、エスニシティとは、自分が何者で、何を信じるのか、所属はどこかという主観的な感覚に基づいた判断と、言語、習慣、生活様式、宗教などの客観的な違いとの両面を併せ持つものということである。つまり、エスニシティとは、文化、言語などの属性の違いに従って分類される客観的指標と、それによる集団においてメンバーのもつ帰属意識、共同体意識といった主観的尺度を合わせもつものであると考えられる。

エスニシティはナショナリズムやネイションとも対比して論じられることも多い。ネイションは国家、国民、民族、おおよそ画一的な文化を伴う社会、あるいは大きな規模の人口や集団を表すが、他の社会集団を指す言葉との差異は、国家という規模を前提に、ネイションは使われるということだろう。ナショナリズムは、国家を形成する意識と独立を目指す思想等を意味する⁷。前者は政治的な単位やエスニシティを同じくする集団と国家の繋がりを表す。集団は、ネイションの構成員として自ら規定する。このナショナリズムは時に、国家の規範を国民に押し付けたり、同化を促したりする。後者は、国家や植民地支配に対抗する意思や行動、運動を意味する。

アジアでは第2次世界大戦後、このナショナリズムの高まりが多くを国を独立に導いた。近年では、東ティモールがインドネシアから独立を果たしているが、この時もそうであったようにナショナリズムは、国家の分裂、分断に至る紛争や衝突をもたらすことがある。このため、多民族国家では、暴動や社会不安を避けるために、弾圧や制圧等の強硬な手段に出たり、ナショナリズムが過激にならないような懐柔策によって、統合を模索したりするということが常に行われる。例えばマレーシアのスローガン「ワン・マレーシア (*Satu Malaysia*)」は、後者である。*Satu* とは、マレーシア語で「1 (one)」のことで、*Satu Malaysia* とは、エスニック・グループ間の融和を目指し

て「1つのマレーシア」を作り上げることをアピールしたものである。

(2) エスニック・グループについて

ここでは、類似した用語である民族、人種あるいは部族の概念を参照しつつ、エスニック・グループについて検討する。

エスニック・グループは、同じエスニシティによって結ばれたグループのことであると考えるが、やはり多義的である。少数派か多数派かを問わず複合社会を構成するグループという解釈は比較的新しい。1990年代までは、エスニック・グループをマイノリティ集団とほぼ同一視して、そのように表現することが主流であった。マイノリティは、国家や社会の中で文化、言語、宗教等において少数派あるいは先住民などを意味している。しかし、今日では数や規模の問題だけでなく女性や消費者など立場の弱いグループとしての少数派に対しても使用される用語となっている。

エスニック・グループは、「民族」あるいは「民族集団」と訳されることもあるが、民族という場合、言語はむしろネイションにあると思われる。もともと、ネイションは簡単に論じられない、歴史的にも非常に複雑で、複合的な概念であるが、国家、国民、民族等を表す場合が多い⁸。

民族には、例えば「マレーシアは多民族国家である」のように国家を形成する特定の条件を持つ集団という用法のほかに、ゲルマン民族や北方民族などの国家や国境に関わらない広義の集団⁹を表す意味もある。また政治的に国民という意味、ネガティブなニュアンスを含むこともある。さらに、民族は、個人にとって選択できない与件、つまり運命共同体であることが強調されているという指摘もある¹⁰。この場合だと、先に触れたような、エスニック・グループのメンバーがもつ後天的な帰属意識という主観的尺度が除外されてしまう。このようなことから、エスニック・グループを民族ととらえることには無理があると思われる。

もう一つ、類似した用語として、「人種 (race)」という語がある。マレーシアでは、政府の文書、声明、マスコミなどあらゆる場面で「人種」という用語をごく日常的に用いていた¹¹。しかしながら、もともと「人種」は生物学的な差異を表すケースが多い。今日では、この言葉が意味する差別や偏見に配慮して、エスニック (ethnic) を用いるように変化している。例えば、マレーシアのエスニック・グループについて考

えたとき、共通の祖先、出身だけでなく歴史的な背景や宗教が大きな影響を与えていることから、この「人種」を当てるのは適当ではない。ただし、差別的な問題や課題を強調する時や意見する場に対しては、「人種 (race)」や「人種問題 (racial issue)」が使われる¹²ということを指摘しておきたい。

加えて、似たような言葉に「部族」という用語がある。だが、そもそもこの「部族」には、パキスタンのトライバル・エリアのような共通の祖先や代々の長をもつ一族が、一定の居住地域に共同に住む集団としての意味合いが強い。どちらかといえば保守的な集団を指し、一族の文化や生活、習慣、伝統を維持することに力点が置かれている。これを考えれば、やはりエスニック・グループに「部族」をあてるのは、概念的にも、現象的にも不適切だと思われる。

いずれにせよエスニック・グループは、言語、習慣、生活様式、宗教などを同じくする人々が、国内に拡散しつつも、共通する同胞意識を持つ存在である。繰り返しになるが、このエスニック・グループの概念には、先に述べた国家における相対的に少数を構成する集団、つまりマイノリティ集団を意味するものと、国家における出自を異にする民族的な下位集団を指すものが含まれると解される。

マレーシアにおいては、エスニック・グループを前者のマイノリティに限る狭義の定義とした場合、オラン・アスリなど先住民のことを指してしまうことになり、本来のこの国家、社会特有のマレー系、華人系、インド系から成る、複合国家としての政治体制を説明する根拠が成り立たなくなる。そこで、本論文では、エスニック・グループを、社会的属性によって分類される客観的指標と、帰属意識等の後天的な主観的尺度とを合わせ持つ存在として、国家、社会を構成する民族的な下位集団であると捉えたいと考える。

第2節 マレーシア社会を構成するエスニック・グループの特徴

(1) 主要なエスニック・グループの歴史的背景

マレーシアの主要なエスニック・グループは、マレー人、華人、インド人のグループである。民族ごとの歴史的背景を、第3章と少し重なるが、簡単にまとめたいと思

う。

マレー人はインドネシアやフィリピンなど広範囲に分布しているポリネシア系の民族で3千年から4千年前に土着したといわれる。長らくインド文化、ヒンドゥー教の影響を受けていた。14世紀末、現在のマラッカ州にシュリーヴィジャヤ王国の王子パラメスワラがスマトラ島から移り、マラッカ王国が成立した。パラメスワラが東西貿易により持ち込まれたイスラームに改宗し、イスラーム国家となる。周辺地域へのイスラームの普及によりイスラーム文化が浸透しインド文化と融合してアラブとは異なる独自のイスラーム文化が築かれた。ちなみにマレー半島にもっとも古くから居住していたと考えられているのは、少数民族ネグリトとセノイである。

サバ・サラワクでは、マレー系少数民族による独自の文化やアニミズムが浸透していたが、一部海岸沿いの部族は、イスラーム化したり、キリスト教化したりしてきた。基本的にマレー語を話す。マレーシア政府は、このような少数民族とマレー人を合わせてブミプトラと呼び、優遇制度を政策として採り入れている。

中華系住民は、繰り返しになるが、海洋貿易時代にマラッカやペナンで現地住民の通婚し、マレー語を学び、マレー人の習慣を受け入れた中華系コミュニティが形成されていった。彼らは中華系の文化習慣も維持しながら、西欧諸国の進出を巧みに取り込み、優れた語学力を用いて、現地住民と中華系住民や西欧人との仲介役となりその地位を高め、経済力をつけていった。その独自の「プラナカン文化」は現在まで残っている。19世紀にイギリスの占領が始まると、彼らの一部がペナンやジョホール、シンガポールへと移り住み、海峡華人としてコミュニティを形成、一般的に英語教育を受け、英語を母語とし、投資するほどの経済力があつたことから英国臣民の地位を与えられ、イギリスの統治下において、イギリス民と同等の権利や保護を受けていた。そのためマレー人との混血は進まず、マレー人ではなく、中華系住民に近い存在として、中華系コミュニティの中で指導的役割を果たす人々を輩出している。

一方、広東・福建といった南部地域の貧困層の農民が、労働者として流入し始める。植民地政府の政策の下に、マレー半島の西岸、特にペラやスランゴールでスズ鉱山の開発が進められ、彼らはスズ鉱山の労働者になり、周辺に居住地域を構えた。これらのクーリー（苦力）と呼ばれる労働者たちは、マレー人との接触がほとんどなく、自分たちの中国文化や生活習慣に沿った華人コミュニティを形成し、定着すると同族や同郷の者呼び寄せ、富を増やし、集団を大きくしていった。現在の華人の大

多数はこの 19 世紀の大量移民である。経済的な才能に長けていたことから、マレー人に比べて相対的に裕福である。言語は各々の中国語方言である。

インドとの関係を見ると、海洋交易により 15 世紀ごろまでマレー半島はインド文化の影響を受けてきた。しかし、現在のインド系住民の多くは、19 世紀前半の中華系移民と同時期に、東インド会社を通して当地域に移住している。南インドのタミル系が、主にサトウキビ栽培、コーヒー栽培やゴム、紅茶の栽培、鉄道建設のための労働力とされた。最も栄えたのがゴム農園で、この時期、マラヤのゴム産業は大きく発展した。彼らは、イギリス植民地政府に労働者として雇われて、南インドからマラヤに来たことが、中華系移住者との大きな違いである。加えて、インドのイギリス植民地政府によりボンベイやマドラス、カルカッタで英語教育を受けたエリートである官吏や商人、実業家などが、マラヤにおけるイギリス植民地政府組織の一員として、都市や農村に入り、生産や労働者を管理していった。

1910 年は、約 2500 人程度の移民であったが、ゴム産業の発展期に入った翌 11 年には 10 万人を超えるようになる。19 世紀末には 7～8 万人だったインド系住民人口は、1921 年には約 47 万人、1931 年には 60 万人を超え、マラヤ独立時には 83 万 1 千人ほどになっていた¹³。一部、イスラームのインド系移民とマレー人との通婚や混血はあったが、インド系移民の多くは、ヒンドゥー教とインドや出身地域の文化、習慣をそのまま持ち込み、定着している。南インドのタミル系が多く、タミル語を主要言語とする。

(2) エスニック・グループの境界線

マレーシアにおけるエスニック・グループの境界を示す特徴は、マレー人、華人、インド人がそれぞれ独自の文化や社会構造を持つことである。

まず、3つのエスニック・グループには、祭事や暦、生活習慣、衣服や装飾、食文化に至るまで多くの違いがある。そして居住地域やさまざまな組織において、エスニック・グループ内で生産、消費といった経済活動が成立する社会構造が完成されている。例えば、クアラルンプールの KL セントラル駅南側の一角には Brickfields インド人街があり、インドから輸入した生活用品から、インド服の高級生地、乾物、生鮮食料品、大音量で音楽を流す CD・DVD ショップ、24 時間営業のインド料理レストラン

などが並ぶ。店員はみなインド人で、客とはタミル語で話す。雑貨店で売られている新聞や雑誌はタミル語かインド人向けの英語紙となる。周辺住民はもちろん、車やバスで来ては朝食をとり、出勤するインド人などもある。しかし、1つ奥のブロックでは店の看板は漢字になり、店舗に並ぶ商品ががらりと変わる。華人のコミュニティエリアであることがすぐにわかる。華人の年寄りが中華料理店の店先で談笑している様子は、台湾や中国でみられる光景とかわらない。

二つ目の特徴として、宗教と言語の境界線が明確なことが挙げられる。マレー人はイスラーム、華人は仏教や道教、インド人はヒンドゥー教を主に信仰している¹⁴。文化や生活習慣もそれぞれの宗教的な影響を受けている。イスラームを国教とするため、どこに行っても立派なモスクが建っている。新しいモスクの建設も多い。一方、中華寺院やヒンドゥー寺院も、それぞれのコミュニティには必ずある。都市部の旧市街などには、一角にモスク、教会があり、向かいにヒンドゥー寺院、反対側には仏教寺院が建っているところもある。バトゥ・ケーブ (Batu Caves) のような観光地化されている寺院を別にすると互いに訪ねたり交流したりする例は多くない。

使用言語はマレー語、華語・中国語方言、タミル語または英語とそれぞれ語源も全く違う言語があり、文字も全く違う。また、互いの言語よりは、英語の習得を目指す傾向がある。歴史的にはイギリス植民地政府の統治下で行政・司法・教育すべてが英語となり、植民地政府は英語教育を受けた一部のエリート層を官職につかせたため、英語が国家における上位言語になった。そして労働者の生活用語であるマレー語や華語・中国語方言、タミル語は、下位言語という位置づけである。1957年マラヤ連邦が独立した時、政治的主導権を握っていたマレー人の政党 UMNO は、この構造を改革するべく、また経済的に豊かな華人の華語に対する危機感もあり、マレー人の特権を華人やインド人グループに容認させ、マレーシア語¹⁵を国語とする。学校教育で英語化を進めていたが、マレーシア語教育を強化する政策に転換している。しかし、すべてをマレーシア語化するには至っていない。

三つ目の特徴として、タイやフィリピンなどにもマレーシアと同じように中華系移民が定住していった歴史があるが、通婚などを経て、華人同士の自然同化あるいは政策的な同化が進んでいる¹⁶。一方、マレー人と華人の通婚はほとんど見られない。ムスリムと婚姻するには改宗しなくてはいけないイスラームの戒律や、そもそも社会的な接点が少ないことが要因である。また、全人口 2800 万人のうち、各エスニック・グル

ープが一定の割合以上いることも理由として挙げられる。シンガポールを除く東南アジアの国々で華人人口の占める割合が 10%を超えるのはタイ¹⁷とブルネイ¹⁸だけである。約 25%を占めているマレーシアは類をみない。その上華人がもっとも多く居住するのはセランゴール州、次いでジョホール州、反対にマレー半島東岸地域は非常に少ないといった人口分布に偏りがある¹⁹ことで、他のエスニック・グループと交わることなく、グループ内でのコミュニティが形成され、持続されたことが、今日でも自然同化を難しくしていると考えられる。

このようにマレーシアでは、移民の歴史、エスニック・グループごとの宗教、言語の違いや経済的な対立が、文化的社会的に高い自律性や独立性を醸成、維持し、エスニック・グループ内で生産、消費、再生産が成立する社会構造を作り上げたことで、ますます同化の必要性がなくなり、客観的にも明確なエスニック・グループを形成している。

(3) エスニック・グループとしての華人の特徴

ここでは改めてマレーシア華人のエスニック・グループとしての特徴に触れておく。華人は華人ネットワークと呼ばれる繋がりを国内外の同胞の間に築いていることはよく知られている。血縁（同族）、地縁（同郷）、業縁（同業）という三縁による関係があり、それに基づいてグループ化されネットワークが広がる。この華人同士がこのネットワークを通じてお互いに助け合い、協力し合って生活基盤を強めることが、華人コミュニティの特徴の 1 つである²⁰。これはそのままマレーシア華人のエスニック・グループの特徴でもある。その華人同士のネットワークは次にも述べるが、マレー人の組織よりもずっと強固で深い。

マレーシア華人のエスニック・グループは、既に述べたように、15 世紀から 19 世紀にかけて中国大陸より移住した。第 1 期に定住し、海峡華人と呼ばれるグループは少数派で、英語を母語とすることが多い。第 2 期の華人たちは方言を含む中国語を母語とするグループで、それぞれの下位言語として福建語、広東語、潮州語などを持ちつつ、共通語として華語を用いる。彼らの 8 割が仏教、道教を進行しているが、キリスト教徒も 1 割程度いる。また少数ながら、ムスリムやヒンドゥー教徒もいる。子供の教育に非常に熱心で、マレーシアのエスニック・グループでは最も早くエスニッ

ク・グループのための学校を設立している。

特に年配者は、自分たちは中国人であるという意識「大中華主義」を持つものも多い。それは「なに人か？」と問われたときに「Chinese」と答えることにも表れている。華人のグループが、地縁、すなわち出身地域によって細分化されていることが多いが、これは、イギリスの植民地政策により、出身地や方言で送りこまれる場所や地域に偏りがあったこと、血縁や地縁を頼りに移民が流入したことに起因する。地縁や血縁で幫（パン）という団体を組織し、強固な協力関係を築いてきた。なかでも特に強い力を持つ福建幫、広東幫、客家幫、潮州幫、海南幫が五大幫と呼ばれる。

華人たちは周知のように、経済活動に長けており、政治的な活動よりも経済を重視する傾向がある。業縁に基づく組織は、中華総商会という経済団体に代表される。なお、政治的には、MCA や Gerakan、DAP という華人のための、あるいは華人中心の政党が彼らの利害を代弁している。

以上のような特徴は、華人団体の組織を強固にし、政治参加や子息の教育などで持続性の高いサイクルを生み出した。また周辺国の華人との人脈を築き、国際的な華人ネットワークが強化され、東南アジアのみならず、世界規模の協力とビジネスを促進している²¹。

むすび

マレーシアは、シンガポールを切り離し、エスニック・グループとしてのマレー人の比率的な優位性を維持した。しかし、すでにイギリス植民地政府が、人口調査等によってマラヤを構成する下位範疇として、マレー人か、華人あるいはインド人かを問い、エスニック・グループの固定化を図ってきたのであり、当初マレー人に分類された人々が自らをマレー人とみなしていたわけではない。むしろ、その結果として、自らをマレー人と意識するようになった²²。

マレーシアがそうであるように、世界には多民族、多言語、多宗教国家といわれる様々なエスニック・グループから構成される国家は数多くある。彼らを一つにまとめ上げ、国家を運営していくのは簡単なことではないのはいままでもない。そのために経済成長を志向する、特に発展途上国、中進国では、時に、主流ではないエスニッ

ク・グループやマイノリティの開発を犠牲にせざるを得ない事もある。そう考えたときに、マレーシアの開発政策は、言語や宗教の違いが、エスニック・グループ間の大きな差異であることを受け入れ、それらの間の衝突を避けつつ、社会の発展という結果の伴った成功を果たしてきたといえる。

マレーシアは経済発展とともに、貧困層へのトリックル・ダウンもあり、中間層が拡大し、社会全体として豊かになりつつある。こうした現象は、マレーシアに限らないが、経済開発がもたらした結果を伴った成功と捉えることができる。その他の発展してきた国でも見る事ができるが、それに共通しているのは、中間層の間に類似した文化が生まれてきていることである。近代的、あるいは都市的なライフスタイルに代表される文化である。

マレーシアに話を戻せば、この中間層の購買意欲に合わせるように、数多くのショッピングモールが作られている。クアラルンプールの新しいモールでは、連日マレー人も華人もインド人もそれぞれ買い物をし、食事をし、遊ぶ、そのような生活を楽しんでいるように見える。また、華人系企業ゲンティングループが開発した大型高原リゾート施設には週末や祝日のたび、多くの観光客が訪れ、若者や家族連れで賑わう。避暑に出かける、あるいは出かけるためにおしゃれをするというのも、マレーシア人にとっては新しい文化である。

そこにはエスニック・グループの境界線は見えない²³。これまで互いに接することが極端に少なく、融合することのなかったグループが、新たに登場した文化に触れ、共感し、共有していくことが、今後どのような成果をもたらすのか。新しい文化は、エスニック・グループにとって、単に同床異夢に過ぎないのか。それとも新たな文化がグループを超えて横断し、これまでのエスニック・グループのあり方に変化をもたらし、彼らの間にマレーシア人という意識を芽生えさせることになるのか。その行方については、当面見守るしかないが、エスニック・グループ間の溝に橋渡しをすることがいかに難しいかは、改めて述べるまでもないであろう。

注

- ¹ ブミブトラ全体では、全人口の 67.4%を占めるが、その他のブミブトラは 12.8%にすぎない。
- ² Department of Statistics, Population and Housing Census, Malaysia 2010, 2011.7.
- ³ 山田満『多民族国家マレーシアの国民統合:インド人の周辺化問題』大学教育出版、2000 年、13～16 頁。
- ⁴ 関根政美『エスニシティの政治社会学』名古屋大学出版、1994 年、6 頁。
- ⁵ Thomas Hylland Eriksen, *Ethnicity and Nationalism*, 2nd, London: Pluto Press, 2002. トーマス・ハイランド・エリクセン著、鈴木清史訳、『エスニシティとナショナリズム』明石書店、2006 年、39 頁。
- ⁶ 初瀬龍平『エスニシティと多文化主義』同文館、1996 年、229 頁。
- ⁷ エリクセン、前掲書、187～196 頁。
- ⁸ ネイションは、おおよそ大きな規模の人口や集団を表し、他の社会集団を指す言葉との差異は、国家的な規模を前提として、使われることが多いと思われる。
- ⁹ 英語の (a people) も (ethnic) も民族と訳されることが多いが、意味にはその差異がある。
- ¹⁰ 古矢旬「「移民国家」における「移民問題」」五十嵐武士編『アメリカの多民族体制』東京大学出版会、2000 年、75 頁。
- ¹¹ 金子芳樹『マレーシアの政治とエスニシティ:華人政治と国民統合』晃洋書房、2001 年、19 頁。
- ¹² 例えば “City top cop says may open sedition probe on Low Yat brawlers after race card flashed” Malaymail Online, <http://www.themalaymailonline.com>, 2015.7.13. 最近起きたマレー人と華人に関わる暴動事件で、「人種問題」ではないと政府や警察が否定する報道。学術書には、Kua Kia Soong, *Racism & racial discrimination in Malaysia : a historical & class perspective*, Petaling Jaya, Selangor : SUARAM, 2020. などが挙げられる。
- ¹³ J.M.Gullick. *Malay society in the late nineteenth century : the beginnings of change*, Singapore : Oxford University Press, 1987. p. 280.
- ¹⁴ エスニック・グループとの関係は強くないが、キリスト教徒も 9.2%を占める。
- ¹⁵ 本章においては、次のとおり定義する。
マレー語: 東南アジアのマレー半島周辺地域で話される言語。広義にはマレーシア語、インドネシア語等を含む。マレー語またはムラコ語 (*Bahasa Melayu*)。
マレーシア語: マレーシアの国語となっているマレー語のこと。 (*Bahasa Malaysia*)
- ¹⁶ Teresita Ang See, *Chinese in the Philippines, The Ethnic Chinese and the Filipinos: One History and One Destiny*, Manila: Kaisa Para Sa Kaunlaran, INC, 2004. pp. 63-64.
- ¹⁷ National Statistical Office. <http://web.nso.go.th/> 2015.11.3.
- ¹⁸ Population in BRUNEI Darussalam 2014. <https://www.depd.gov.bn/SitePages/Population.aspx>. 2015.11.3.
- ¹⁹ 田崎亜希子「マレーシア中華系住民の移住と定住の歴史過程」『武蔵野学院大学大学院研究紀要』第7輯、2014 年、117～127 頁。
- ²⁰ 朱炎『華人ネットワークの秘密』東洋経済新報社、1995 年、6～7 頁。
- ²¹ 前掲書、10 頁。
- ²² 白石隆「最後の波」のあとに『現代社会学 24 民族・国家・エスニシティ』岩波書店、1996 年、213～224 頁。
- ²³ Gaik Cheng Khoo and Julion C. H. Lee (eds.) *Malaysia's New Ethnoscapes and Ways of Belonging*, London and New York: Routledge, 2016, p.2.